

令和3年度第2回 滋賀県観光事業審議会 議事概要

1 開催日時、場所

令和3年11月19日（金） 15:00～16:50

滋賀県庁東館7階大会議室

2 出席委員（敬称略、五十音順）

○委員：石川 亮、伊吹 惠鐘、上田 未来、金子 博美、川口 洋美、
近藤 直人、佐藤 泉、野村 ゆき子、羽田 真樹子、林 優里、
日比野 敏陽、廣岡 裕一、松田 大祐、宮川 富子、吉田 満梨

○オブザーバー：

江川 寛、濱 秀樹、森田 正志

3 議事等

■ 水上商工観光労働部長挨拶

■ 定足数の確認

■ 新任委員の紹介

■ 議題（1）（仮称）滋賀県観光振興ビジョン素案について

・事務局より、資料3-1、資料3-2、資料3-3について説明。また、以下の観点からの意見もお願いした。

①観光を通じて、滋賀県のマインドを持った関係人口をどのように増やしていくのか。

②SDGs、MLGsを素材として生かした教育旅行

③インバウンド

（会長）

・まずは、資料3-3、3頁の「シガリズムを共通コンセプトとした観光の推進」について意見をいただければと思う。

（委員）

・事前に戴いたデータをざっと見ていたが、印象としては非常にまとまってきたと

考えている。現在まだコロナ禍であるので、基本的な方向性にまず「新型コロナウイルス感染症からの着実な回復」から始まっているところは大事かと思う。

骨子案をいただいたときには、Mother Lake Goals の記載がなかったので、個人的に指摘させてもらった。CO2 ネットゼロ社会ともいわれているが、COP26 でも中々議論が進まない。これは世界中で暗中模索の中でより良い答えを探していかないといけないということだと思ふし、世界の喫緊の課題であるとの認識である。滋賀県は Mother Lake Goals をこの春にまとめられた。今後 CO2 ネットゼロも推進されるなど、自分たちの環境を重視したと思ふし、今後第6波が来た時にはいろんな自粛をしなければならないことを念頭におかれていると思ふ。

最初の発言なので、もう少し何かあればお話ししたい。

(委員)

・素案の概要 2/2 において、重点としているところや施策の柱など、基本的なことを載せてもらっている。また、シガリズムを推してくれるのは一事業者としてありがたいし、素案自体の方向性は素敵だと思っている。

しかし、コロナ禍によって団体旅行が減り、旅行の形が変わってきている。その受け入れと教育旅行の受け入れが対極していると感じる。受け入れ環境の整備を柱の中で記載してあるが、柱なので細かく書く必要はないかもしれないが、体験型の受け入れを推し進める一方、集団を推していくのをどう両立させるのか。その指標があるといいかと思ふ。

(会長)

・事務局から説明をお願いしたい。

(事務局)

・皆様の意見をいただきながら、議論を深めていきたいところ。教育旅行において体験はとても大切で、特に滋賀県は MLGs を打ち出し、環境学習をはじめとした琵琶湖の保全活動に繋がるようなことをやる。それが世界の SDGs に繋がる。全国の生徒に、環境学習に繋がるような訴求力のあるテーマであるので、それらを上手につなげる教育旅行にしていきたい。

一方、団体旅行とどう両立するかは難しい課題。団体旅行はバスで動くことが多いと思ふが、バス協会等の皆様もより安全安心な感染対策を徹底したバス旅行の在り方を模索されていると思ふし、受け入れ施設の皆様も大変意識されていると思ふ。また、団体旅

行であってもグループに分かれての活動というものも試行されているとお聞きするので、コロナ禍における新しい体験学習を一緒に作っていききたい。

(委員)

・今の話の流れだが、長浜黒壁は、コロナ禍前の秋に教育旅行は24団体であったが、この秋は35団体となり、大幅に増えている。前回の審議会でも少し申し上げたが、これまで長浜に来ていなかった奈良方面からの来訪が増えた。「選ぶ先」としていただいていると実感している。

一方で、これまで一つの館で100名程の学生を受け入れていたが、密を避けるため街中の空き店舗等を活用し、人を減らして、かつ前を向いて座って体験する体験教室となり、会話もなく静かにガラスの製作体験をしている。会場を分散させることで、その分スタッフも必要となるし、アクリル板や頻繁な消毒等も必要で、これからもその負担と共存していかないといけないと感じている。教育旅行は、コロナ禍が落ち着いていくとブランド力のある場所に戻っていくのではないかと懸念している。

長浜黒壁の近くには琵琶湖があるが、そのような印象がお客様には伝わっていない。最近街づくりで事業者の皆様と、「びわ湖がすぐ近くにある」という表現を使い発信している。コロナがあって「連携」という言葉を使うようになった。これまで単体で動いていたものを行政や商店街、他の事業者の方々と一緒に活動させていただくことが増え、連携して心強い一方で、この連携を次の変化に変えることが難しいと思っている。「いいこと」と思い込み、主催者側の満足だけで動くのではなく、変わることを恐れずにやっていかないといけないと思う。

教育旅行に関しては、今の課題を皆で議論しながら今後も受け入れ態勢が整うようにしていきたい。

(委員)

・観光事業者としては、平日の稼働に教育旅行をどんと受け入れたい。ただし、マイクロツーリズムに対する感染防止のガイドラインとは別に、団体を受け入れる際の対策に関するガイドラインが欲しい。今は団体を受け入れることに引け目を感じる。先ほどの私の発言がネガティブだったかもしれないが、教育旅行を押し出すのであれば、施策の柱にも記載してほしい。今あるガイドラインだけでなく、観光の団体客受け入れに対する滋賀県独自のガイドラインを作成してほしい。

受け入れ環境整備においても、今まで団体客を受け入れていない施設にとっては、50人100人と急に来るとなると準備がいる。第1回審議会においても交通関係の話が出た

が、団体を受け入れるためには相当整備が必要となるため、それに対してポジティブな対応をしていただけると嬉しい。

(会長)

・基本方針の話題から具体的話になってきているが、シガリズムの基本方針に対する異論はないということで良いか。

(委員)

・シガリズムの基本方針自体に対する異論はない。シガリズムは今のところ、観光関係のみに広めているのか、他にも広めているのか。シガリズムの考え方からすれば、観光に限らず言えることかと思う。

先日、観光分野以外の方にシガリズムの話をしたら全然ご存じなかった。概要第4章1「3つの視点」に色々な産業との連携を書いているので、出来るだけ早い段階で観光分野以外の県民の皆様にシガリズムの考え方を定着させる努力、県外の方へのPRを、今以上にわかりやすく広く伝わる感じでやっていかないと、我々が方針を作っても他に伝わらない気がするので、しっかりとPR等したほうが良いと思う。

(事務局)

・元々シガリズムという考え方は、観光ツーリズムを推進する中で出てきた言葉である。最近、これを県政全体に広げる考え方がでてきた。コロナ禍で社会全体のリズム、人の生活リズム、心のリズムが変調をきたしたり、狂ってきている。それを滋賀県政の大きな理念である「健康しが」を進める中で、社会全体や人の心を含めて「シガリズム」で心と健康を取り戻す、社会の健康を取り戻すよう県政全体を進めようという方向性が出ており、知事もそのような使い方をし始めている。従って、当初よりも大変広がりをもってきた現状。県政としてどういう使い方をするのかは議論をする中でももう少し整理をしていきたい。

シガリズムを県政全体で進める中の観光分野での取り組みが観光振興ビジョンとなっており、今改定を進めているところ。

(委員)

・シガリズムとは、観光だけでなく、本来の滋賀県民の暮らしそのものである。これは何もこれから創るものではなく、昔からあるものをシガリズムという新しいフレーズで括ったものと理解している。

半世紀ほど前に琵琶湖に赤潮が発生したが、今思うと琵琶湖が病んでいるようなものであった。そこで、「どうしようか」といって石けん運動が生まれ、環境問題に取り組んだ。当時は高度経済成長期なので、環境と言っても、「何を言っているんだ」と相手にされなかったが、滋賀県は取り組んだ。これは、昔から滋賀県民が持っている DNA が県民活動を起こして盛り上がったのだと思うし、他府県ではできなかったと思う。「滋賀県はびわ湖を預かっています」というフレーズが如実にそれを表していると思う。この発想は滋賀県でしかあり得ない。これは「シガリズム」から生まれてきていると思う。昔からある滋賀県民の精神をもう一度見直し、ブラッシュアップし再確認していこうというものだと思う。「関係人口を増やす」など、半世紀前に滋賀県がやろうとしたことを今になって世界が目撃した。

それから、環境教育は次の世代の方々に大切なことである。シガリズムを教育旅行の中心として売り出していく。また、COP26でも取り上げられたが世界はそちらを向いている。シガリズムは半世紀前からあったが、今になって世界から見直された。そういう意味では、シガリズムは非常に的を射たものであり、大賛成である。ただ、非常に分かりにくい。そこで、分かりやすくストーリーにするなどしてほしい。

MLGs の冒頭に書かれている「あなたはいつも私のそばにいてくれる」など、テレビで流すととんでもないインパクトがあると思う。「滋賀県はこういうものを生活にしている」と発信することによって滋賀県を注目してもらえるインセンティブとなり、滋賀県の観光を分かってもらえると思うし、結果として滋賀県民ももう一度確認してもらえる。その意味で発信が大切だと思う。

(会長)

・ここまででシガリズムの基本方針に対する異論はないと思うので、資料 3-2 論点③④まで広げて、引き続き議論をお願いしたい。

(委員)

・シガリズムはイメージとしてはよいが、どう具体的に観光に生かしていくかという点で、お客様に来ていただける具体的な提案をしていくことが重要だと思う。

教育旅行の話に戻るが、先ほどの黒壁のように、教育旅行に来る方は体験メインで来られる方が多いのか、アクティビティメインなのか、もしくは歴史や史跡めぐりがメインなのか。個人的な話になるが、先日、賤ヶ岳より琵琶湖（竹生島）と余呉湖を見て、滋賀県の歴史の奥深さを感じた。教育旅行の観点からすれば、「歴史を学ぶ」は一つのキーになると思ったが、私の認識不足もあるので、教育旅行の現状を教えてほしい。また、これま

で戦国ワンダーランドなどの取り組みも実施されてきたと思うが、歴史や戦国をより深掘した取組などの今後の展望もあれば教えてほしい。

(会長)

・教育旅行について、京都など近場から遠足で来るケースと、遠くから修学旅行で来るケースでは傾向が異なるかもしれないので、そこもあわせて事務局から回答をお願いしたい。

(事務局)

・今明確な統計は持ち合わせていないが、聞くところでは、小学校であれば黒壁や信楽での体験や、アクティビティが多い。もう少し上の世代になると歴史教育の要素も入ってくると思う。中学生や高校生になると、自分たちで教育旅行の中身を考える取組をしていると聞く。打ち出し方としては、色々な可能性を広められるように考えている。

重ねてとなるが、今明確なデータを持ち合わせていない状況である。

(会長)

・今の点について、よければ甲賀市の現状を教えてほしい。

(委員)

・信楽では、中学生までの教育旅行工程の一つとして、焼き物体験を組み入れていただいている。新型コロナウイルス感染症の状況がかなり落ち着いていることから、教育旅行もかなり戻ってきている。聞くところによると、一般の団体旅行はまだ戻っていないが、小中学生の教育旅行は沢山戻ってきている状況。

先週京都に行ったが、多数の観光バスで清水寺付近は大渋滞であった。修学旅行生が多く、「コロナ禍前の京都の雰囲気に戻ってきたな」という印象であった。実は、最近楽しいこともなかったのが笑いにしようとして祇園の吉本に行ってきた。500席のキャパで満席であったが、漫才師が「修学旅行の方は手を挙げて」というと、9割方が手を挙げており、我々世代は数人であった。修学旅行を含め、団体旅行の回復力は早いと感じた。一方で、個人単位の旅行の戻りは早くはないと感じる。

観光が経済界の中で一番早く回復するのではないかと肌感覚では感じるころ。

シガリズムについてだが、「シガリズム」というコンセプトでまとめていくのは良いと思う。ただ、「ゆっくりていねいに暮らしてきた」というフレーズはどういうイメージか、教えてほしい。

(事務局)

・私も最近ビワイチに行ってきたが、シガリズムの時間が流れていた。滋賀県の中でも色々な地域性があるが、暮らしの中で水や信仰と関わり、人々との付き合い方の中で滋賀県のもつ、ゆったりと流れるようなリズムがあるかと思う。山々に囲まれた広がりの中で、静かに流れるリズムを大事にして受け継がれてきた。滋賀県には琵琶湖に流れる自然の空間があるので、それを含めてゆったりしている時間とイメージしている。

(会長)

・資料3-2について、企業経営の観点からも意見をいただきたい。

(委員)

・以前、観光を滋賀県の産業と結び付けていただきたいと言ったことがあるかと思う。滋賀県には、信楽焼や彦根仏壇などの伝統工芸がある。県内の小学生は社会科の勉強で伝統工芸に携わり、技術について学んだり、工場見学などを行っている。教育旅行については、年代や教育プログラムにあわせて旅行されていると認識している。また、滋賀県の多くの産業と絡めていってほしいと考えている。

企業経営について、彦根では世界遺産登録に向けて、米原市や彦根市、周辺自治体とコンソーシアムを立ち上げていただいております。機運が高まってきたが、地域だけの話ではなく滋賀県全体の話として、街づくりの話として捉えてもらいたい。観光にしる、産業にしる、滋賀県で生活する人が「滋賀県らしさ」を認識しないといけないと思うし、「いかに滋賀県らしさを出して暮らすか」と認識しなければならない。そのためには、どう伝えていくのかということはとても大切なことであると思う。

彦根においては、彦根城周辺で車が途切れることがない位、11月は観光客が戻ってきている実感がある。しかし、受け入れる側の気持ちがコロナ禍で沈みきっており、十分な対応が出来ているのか疑問に思うところ。

話は変わるが、インバウンドについて。インバウンドで京都はすさまじい混雑となったりお店も変わってしまったため、京都が好きだったのにそうでもなくなってしまった。滋賀県にはそうなってほしくない。地産地消の美味しい野菜など、もっと表に出してPRする仕組みを作ることに力を入れてほしい。琵琶湖以外にも山があることをもっと打ち出すなど、いいところを出し切ってほしい。

もっともっと可能性のある滋賀県であることを自覚して、もっと打ち出していけたら良いと思う。

(委員)

・現在は、いつ日本の入国制限が緩和されるかなど業界で情報交換をしている。その中で気になるのがサステナビリティとオーガニックの分野。それらはシガリズムのイメージとも合うな、と思っている。私の会社でも organic rice field experience を入れているところだが、テストツアーの感触が非常によく、特に環境に優しい農業などイメージが滋賀県にぴったりでぜひ推進していきたいと思っている。当社は富裕層をターゲットとしているが、その層にはオーガニックやビーガン、ベジタリアンなどが、まさに旬のキーワードである。そういうイメージに大変親和性があると思い聞いていた。サステナビリティやエコツーリズムについてもよく聞かれるし、その分野に力を入れているパートナーと仕事がしたいという業者からの問い合わせもある。自社立ち上げからその点は意識していたが、そういうエココンシャスな事業者が増えると、滋賀県のエコロジカルなイメージがより広がっていくのかなと思っている。

一方で、エコと言うからには、人数とのバランスや兼ね合いが問題として出てくるのではないか。とはいえ、事業として成立しないと意味がないので、バランスが非常に難しいと思っている。そのあたりが先駆的に解決できれば素晴らしいと思う。その意味で、第6章の成果指標のどこを重視するのか気になる。入込観光客数もとても大事だが、これを評価としてあげると、先ほどのエコロジーとのバランスが難しいと思う。私のところは他の事業者とは規模が異なるので、他の事業者に当てはまらないかもしれないが、入込観光客数と消費単価の掛け算であれば、消費単価を重視している。

もう一つ気になるのが「インバウンド」であり、インバウンドという大きな市場で見えてしまうのは違うのではないかと思っている。我々はその中でも特定のターゲットに向けており、オーガニックが好きな方々やサステナビリティにコンシャスな方々をターゲットとしている。インバウンドの数を単に増やしていくことになるとういう概念はなくなり、「やっぱり人数」となってしまうのではないか。せっかくシガリズムを訴求するのであれば、ここに対して親和性がある人やここを評価する市場に対して積極的に発信するべきで、その匂いが感じられないのが気になる。出来ればそういう方々へのメッセージを強く発信していただけると嬉しい。

(会長)

・事務局から、指標や重点分野でのエコと大人数の観光客のバランスについて説明をお願いしたい。

(事務局)

・目標をどこに置くかということについてはこれから議論していかないといけないが、色々な業態の方がおられる中で難しい面もある。持続可能な観光を考えたときに、ずっと右肩上がりの観光が良いかどうか議論しており、今回9年間のビジョンを作成する中で、3年ずつフェーズを設定している。単なる回復だけでなくより良いものにしようとして「回復・変革」、下地が出来たら「成長」、そののち「成熟」して持続可能性を高めていくのが良いと思っているが、数値目標について、現時点で2030年の設定が難しいので、数値設定はしない方向で考えている。

指標については、客数の取り戻しも大切だし、消費単価の上昇も大切だと考えている。皆様とともに取り組んでいきたい。質の向上として、満足度やリピーター率も設定している。それと、成果指標③県民のシガリズム推奨意向についてだが、これは県外の方に滋賀県観光をお勧めしたいかという意向の調査を考えている。そういう受け入れの文化を広めることを含めた意識の向上を考えている。今いただいた視点は、ビジョン作成だけでなくその先の取組においても生かしていきたい。

(委員)

・私も成果指標がこれで良いのかと思っている。従来の観光は、「限られた時間でいかに数をこなすか」であったが、シガリズムは「ゆったりした、心身が心地いいと感じる時間」の中で滋賀を楽しんでもらう。それはすごく良いと思うし、シガリズムはその方向性を言葉にしているが、それは消費となじまないと思う。何度も来てもらうことでトータルでは増えるのかもしれないが、1回あたりの単価や消費額では測れないと思う。指標の観光消費額は総額なので、何度も来てもらうことで、滋賀県でお金を使っていただくことにはなるが、「質の向上」の定性的な評価をどう定めるのか。それは、未だどの自治体も出ていない課題だと思う。数ではなく質というのは私もいつも考えているところ。

高島市は今移住者が増えている。シガリズムは移住定住にも関わっていると思っている。京都が好きな東京の方が、高島に移住された。その方は、「消費だけの生活にしたくないから」とおっしゃった。これは観光にも置き換えられると思う。「消費だけの観光にしたくないから滋賀県に来た」という方向性にならないか。消費だけの観光とは、用意されたサービスを一方的に受け取って消費するだけである。自らの感性によって動いていく観光が、「消費だけじゃない」観光だと思うし、「滋賀マインド」だと思う。特に質の向上の中で、環境への意識が高い感性の方に来てもらい、消費するのではなく滋賀県の環境を大事にしながら楽しむ方々に来てもらいたい。その方々で循環する、一方通行ではない観光になればいいなと思う。受け入れる側も、サービスを提供するというよりは来ていた

だく方の過ごす時間をサポートできるような、ナビゲーターの視点をもって観光をやっ
ていかなければならないかと思う。

(委員)

・私は永源寺という山の中の地区で育ったが、祖母から「上には上の務めがある」「上流
に住む人間は水を大切にしろ」と言われて育ってきたので、MLGs がずっと入ってき
た。とてもいいなと思った。色々な媒体を使って、もっと色々な方の目にとまるようにし
たら良いと思う。

職場体験として毎年地元の中学生を受け入れていたが、新型コロナウイルスへの感染
が絶対起きないと言い切れないこと、他府県ナンバーのお客が多いことなどから、万が
一感染した場合に責任がとれないので今年はお断りをした。これだけ感染者が減ってい
ても及び腰になっていると感じる。

一つ質問だが、指標にある「ビワイチ体験者数」はどのように数えているのか教えてほ
しい。

(事務局)

・びわ湖推進協議会が出している琵琶湖一周の認定書からの年間推計と、年2日間定点
観測を行っており、その人数とを考慮して、算出している。令和2年は8万人、コロナ禍
前であれば10万人体験者数がいた。滋賀県の令和2年延観光入込客数が3割減なのに対
し、密を避けられるため2割現にとどまっていると考えている。

(委員)

・詳しいデータを基にした話ではないが、首都圏も巨大な人口を抱えていて、静岡県や栃
木県、千葉県がしのぎを削って誘客している。コロナ禍前は、鎌倉など人が多くて身動き
がとれない位で、持続可能ではないなと思った。江ノ電の周りにも車が多く、本当にこれ
でいいのかと思っており、鎌倉在住の友人も同じ感想をもっている。コロナ禍前の京都も
同様だったと思う。本当にこれで良いのかと感じていた。資料を見ていて、延観光入込客
数だけで判断するのは、本当に滋賀県に相応しいのかと思う。

また、コロナ禍前に韓国の新聞記者を滋賀県に案内したことがあるが、歴史に関心
のある方が多く、滋賀県は渡来人の関係も多いため大変興味を持ってくれ、また来たいと
言っていた。テーマをもって滋賀県の魅力を伝えることは有効であるが、大量の観光客
を誘致するよりは、ある種の人たちにアトラクティブであることが良いと思う。解は私
も持っていないが、解が出なくても審議会でこのように議論することが大切かと思う。

(委員)

・私は関西空港のインフォメーションセンターに勤めており、インバウンドについてであるが、戻りが早いのではないかと、外国人の入国制限緩和後は一気に来るかな、という感触がある。先般緊急事態宣言が解除されてから、当方の外国人スタッフが滋賀県の案内をしている。近江八幡や竹生島にスタッフは携わったが、平日にもかかわらず非常に混雑しており、今後の受け入れ態勢の課題があったと聞いている。

指標において、基準目標を設けるのは重要だが、以前と同じようにはいかないと思うので、受け入れ態勢などを工夫していく必要があると感じている。

(副会長)

・皆シガリズムのコンセプトにすごく共感されていますし、ツーリズムだけではない広がりを持つことも含めて、まとまりのあるコンセプトだと思う。「ゆっくりいてねいに暮らししてきた滋賀の時間」の流れや暮らしを体感できたのかどうかを図れるような方法はないか。「滋賀に住んでみたい」という関係人口から定住に繋がる方を図るのか、暮らしに対して共感する方を図るのか、そのあたりを工夫されるのかなと思って聞いていた。あと、全体を通して思ったのが、滋賀の暮らしを体験してもらい、その結果として心のリズムを整えてもらう意味は、継続的に来ていただくことをかなり含んでいるテーマだと思う。整体で体を整えるためには定期的に通わないといけないように、自分の心のリズムを整えるためには一定期間滞在型で長く滞在するのもいいし、短期滞在でも繰り返し滋賀に行くことができるような施策に繋がればいいなと思って聞いていた。指標が大事なのもわかるが、トータルでその方が若い時から年齢を重ねるまで繰り返し滋賀を訪れる中でいくらか価値を生むのか、という関係性を前提とした指標の方がふさわしい感じがする。

大きなところで、ビジョンの大きな枠組みと発言いただいた委員の皆様のコメントにはすごく共感しながら拝聴していたが、関係人口の増加につなげたいというお話も、検索して訪れるようなツーリズムに繋げるような施策、例えばビワイチも一回回ったら終わりではなく、徒歩や公共交通機関も含めて何度も訪れて滋賀の暮らしの良さを実感していただく取組に繋がればよいなと思った。

また、重点分野の整理の仕方だが、「誰に来てもらうのか」という話と、「どういった価値を感じてもらうのか」という話が混じっている6項目になっていると感じる。2～5は「誰に来てもらうのか」という分け方だが、「体験型・交流型観光」や「旅マエ、旅アート」に物産品を通じて滋賀の暮らしの良さを実感してもらうことでいうと、1と6については2と5に掛け合わせられる要素かと思われるので、整理の仕方が工夫できるとこ

ろがあるのかなと思った。

(委員)

・皆様のお話では、滋賀県への観光客はこれ以上増えないほうが良いとお考えかと思うが、そもそも滋賀県としては、滋賀県観光の受け入れのキャパシティがどれくらいかと考えているか。また、実際これ以上観光客が増えるとシガリズムではなくなるのか。私は、まだまだ工夫次第ではもっと色々なお客様に来てもらえるのではないかと考えている。観光関連事業者が増えれば受け入れ態勢も増えるし、渋滞が起こるのであれば別途交通を工夫するなど出来ると思う。大人数で来られた場合どういう受け入れ態勢がとれるのかも工夫できると思う。重点項目に「受け入れ態勢の整備」もあっていいかと思う。

最近発表された都道府県魅力度ランキングで、滋賀県は高くなかった。それは、まだまだ滋賀県が知られていないので、滋賀県を「1番」として入れる人が少ないから、北海道や沖縄県などに投票するのではないか。たとえ滋賀県が2番目に好きだったとしても、1票しか入れられないのであれば他府県にしようか、ということで票が入らない。この、とても魅力的な滋賀県のことをご存じでないのであればやはり来ていただきたいと思う。「今こそ滋賀を旅しよう」で滋賀県民の方に再び魅力を発見していただいた。滋賀県で楽しんでもらうことで観光が移住に繋がり、他の産業にも繋がる。観光が元気になると滋賀県全体が盛り上がると思うので、そのあたりもあわせて考えてほしい。

(事務局)

・受け入れ環境の整備は引き続き大切かと思う。量の確保という部分も一定まだまだ必要であるし、質を高めていくこともあわせてする必要がある。施策の柱の「3」に位置付けているが、団体客向けの事業者もおられるし、大きな施設を運営されている事業者もおられるので、環境整備につながるように、滋賀県全体の魅力を高めて、きていただく人も一定いていただかないと事業の持続可能性も高まらない。すべてがリンクしているので、今の視点を忘れないようにしっかり取組にもつなげていきたい。

(会長)

・予定時間を過ぎたので、議論は以上としてオブザーバーの皆様から一言ずついただきたい。

(オブザーバー)

・今日の話は、「観光客に来てほしいが、環境のことも考えて」という、相反する内容で、

難しい内容だった。だからこそ9年間のビジョンとして、目標を定めたいという県の方針かと思う。3年毎に区切ってやっていくのも良いのではないか。

今日は非常に貴重なご意見をいただいた。

(オブザーバー)

・コロナ禍で見通しのきかない時期において、これだけうまくまとめていただきありがたい。特に、重点分野というものをしっかり位置付けていただき、色々な取組にシガリズムがあるということを知りやすく調整いただければ、幅広い事業者が「これでやっぺいこう」となるビジョンになるかと感じた。

びわこビジターズビューローでも中期計画の策定を行っているので、是非参考にしながら策定し、県と両輪となり進めていきたいと考えている。

(オブザーバー)

・よくできていると思う。シガリズムも観光に特化した始まりだったかもしれないが、観光はすそ野が広く、関わればすべてが同じ方向を向く。地域づくりを含めて進めていければいいかと思う。目的をもった形でやる、成果指標についても一般的に国としても観光客数の増減を出してしまうが、やはり中身かと思うので、大変難しいとは思いますが、そこを考えて目標を設定出来れば良いと思う。

(会長)

・予定時間を過ぎたので、以上とさせていただきます。なお、次回の滋賀県観光事業審議会は12月22日の午前中を予定している。事務局にお返しする。

(事務局)

・次回の滋賀県観光事業審議会は12月22日の午前中を予定しており、詳細は改めてご連絡させて頂く。以上で、令和3年度第2回滋賀県観光事業審議会を終了させていただきます。

<閉会>